

### ⑤ 地域住民の生活・文化に負荷がかからないような配慮

持続的にロングトレイルを活用していくためには、自然環境や地域コミュニティ、歴史・文化資源（地域の信仰や風習含む）の意味を理解し、地域住民の生活・文化に負荷がかからないように配慮する必要があります。

また、アクティビティを実施するフィールドにおいて、地域住民のプライバシーや特に配慮が必要とされる場所がある場合は、参加者に十分な説明と情報提供を行う必要があります。

特に気を付けるべきポイントとして、音を出さない・ゴミを捨てない・写真を撮らない・通つてよい時間帯や場所への配慮などが挙げられます。



### ⑥ 寄付や美化活動の実施等、自然環境保全への積極的な取組

地域コミュニティとの信頼関係を構築するためにも、アクティビティ事業者は、地域の環境保全に積極的に関与することが求められています。収益の一部を地域の環境保全協賛金として寄付する、ごみ拾い・環境美化活動等に参加するなどの方法があります。また、地域住民とともに活動できる貢献活動を組み込んだアクティビティの実施も、住民の理解促進に効果的です。



### ⑦ 自然環境のモニタリングによる環境保全への貢献

ロングトレイルの活用においては、官民連携で自然環境の保全に取り組む必要があります。アクティビティ事業者は、アクティビティを実施しているフィールド内の自然環境を保全するために、自ら自然環境のモニタリングをしたり、地域で行っているモニタリングに協力をするなど、地域の持続可能な自然環境保全や適切な利用に貢献することが重要です。

また、行政や観光協会、また環境保護団体としては、日々フィールドに出て自然環境の変化を観察しているガイドからの情報は貴重であり、日常的にアクティビティ事業者と情報共有を行い、自然環境の保護と利用のあり方について、議論を行い、各種対策についても検討していく必要があります。

#### 【参考事例】釧路川源流ネットワーク（弟子屈町）

水源の約80%が湧水である屈斜路湖の水が、釧路川として流れ出ている源流部は、非常に透明度が高く、カヌーイストの憧れの川とも呼ばれて多数のカヌー愛好家が訪れる場所です。カヌーツアーを営む事業所は10社以上あり川の清掃活動などを含め自然を壊さず共存できる環境を整備するべく、「釧路川源流ネットワーク」が組織され、「釧路川源流ネットワーク憲章・ルール」を策定しています。源流部は倒木が非常に多い川ですが、行く手を遮るように倒れた木であっても、ワイルドなこの川の雰囲気損なうことなく、自然景観と安全性を両立させるために、必要最低限の処理・整備に留めています。また 処理・整備した場合はモニタリングシートで必ず報告し、構成員で共有するとともに、データを蓄積し、継続的に検証しています。

【出典】釧路川源流ネットワーク憲章・ルール

<http://www.somokuya.com/kensyou.pdf>



【画像出典】釧路川源流ネットワーク

## 5-2. 地域コミュニティへの経済的・社会的な貢献

### ① 地元資本の製品やサービスの利用促進等

ロングトレイルに関わるアクティビティ事業者は、常に地域経済への貢献を意識する必要があります。そのためにも、アクティビティの中で地元資本の観光事業者（食事・宿泊・交通等）の製品やサービスの利用を促進し、地元経済や雇用の維持・創出に貢献する姿勢が必要です（注6）。ツアーで提供のお茶やお菓子などの製造業者、立ち寄り場所でのお土産品を販売する事業者、配送や回送のサービスなど、地域資本に貢献できるかどうかを事業者選定の基準にするよう、方針を立てましょう。

日頃より地域内の商工会議所、商工会、物産振興会等の地域の経済団体とも密に情報共有を行うなど、ロングトレイル活用促進における協力体制をつくることで、様々な連携がとりやすくなります。地域で実施されているイベントや祭りをツアーに組み込んで地域と旅行者の交流につなげることも、持続可能な観光地域づくりにつながる取組みと言えます。



（注6）たとえば、摩周・屈斜路トレイルでのハイキングツアーでは、ガイドが季節に応じて地元産のスイーツをハイキングやスノーシューのツアー中のコーヒープレイクで出すなどの演出をしています。

### ② 地域コミュニティ関係者との相互理解にむけた情報共有

アクティビティ事業者は、ロングトレイル活用による経済的・社会的な地域のベネフィット（便益）だけでなく、旅行者が増えることによる負の影響やその対策についても説明し、地域コミュニティとの情報共有を通じて相互理解に努めていくことが、ロングトレイルの継続的な活用と持続可能な観光地域づくりにもつながります。

#### 【具体的な取組案】

阿寒摩周国立公園内に位置する弟子屈町では、2008年に地域住民主体で「てしかがえこまち推進協議会」が設立され、エコツーリズムが推進されています。発足以来、観光振興を担う人材育成を目的に「てしかが観光塾」を開催するなど、地域関係者の相互理解を深める環境づくりが行われています。また地域の小学生を対象として、硫黄山での「アトサヌプリトレッキングツアー」を体験してもらい、環境教育の機会を提供するなど、地域コミュニティとの関係づくりが継続的に行われています。



【画像提供】てしかがえこまち推進協議会

### ③ 地域の文化遺産の価値についての情報提供と注意喚起

ロングトレイルの活用においては、文化保全の観点も重要となります。アクティビティ事業者は、参加者に地域の文化遺産について尊厳と尊敬を持つように、その価値について伝え、かつ文化財を傷つけたり、持ち帰ったりしないように注意喚起を行う必要があります。

文化財として指定されているもの以外にも、地域で大切にされている場所、史跡、建物、歴史などは、文化的価値がある地域資源として尊重しましょう。

#### 【参考事例】国東半島峯道ロングトレイルにおけるトレッキングルール

大分県国東半島では、古くから行われてきた修行の道を含めて構成されたルートが歴史を感じることができる人気のハイキングルートとなっています。地域住民が先祖から祈りの対象として受け継いできた貴重な文化遺産が点在していることから、トレッキングのルールとして、文化遺産の保護に関する情報発信を行っています。

【出所】<http://www.kunisakihantou-trail.com/rule/index.html>

### ④ 地域の文化遺産の価値についての情報提供と注意喚起

地域住民が、地域が持つ貴重な自然環境や固有の地域文化に誇りを持てるような環境を整えていくための人材を育成することは、持続可能な観光地域づくりにおいて大変重要なことです。

この分野に積極的に貢献するため、ガイド自身が学校教育の場を活用して、地域の自然環境や生態系、文化的な習慣、食文化について話をしたり、実際にアクティビティ体験をする場を設定するなど、さまざまな機会をつくることができます。次世代の担い手を育成することは、地域の価値を高め、ガイド業の持続性に大きく寄与します。



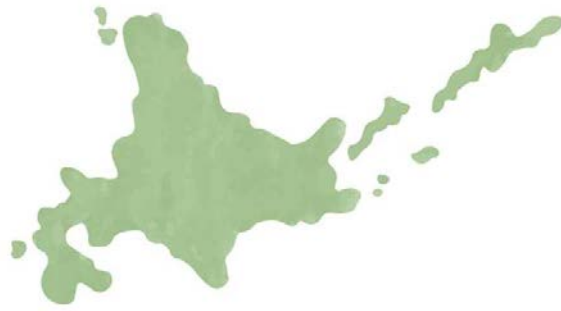
### ⑤ CO2排出量の削減への貢献にむけた対応

気候変動対策を意識したロングトレイルの活用のために、アクティビティを実施する際のCO2排出量の削減へ取り組みましょう。移動時の公共交通機関の利用促進は、CO2削減に貢献するだけでなく、地域の交通システム維持の観点からも特に重要です。参加者がより環境負荷の少ない交通手段を選択できるよう、自社サイトの案内にも工夫が必要です。公共交通機関によるアクセスが困難な地域においては、目的地までのCO2排出量を計算し、カーボンオフセットを利用するなどの工夫も考えられます。他にも、地元産品・商品など地産地消を促進させるなど、さまざまな工夫で温室効果ガスを減らし、ネットゼロエミッションを達成していかななくてはなりません。

阿寒摩周国立公園は、国立公園において先行して脱炭素化に取り組むエリアとして環境省が推進する「ゼロカーボンパーク」に登録されました。国立公園内における電気自動車等の活用、国立公園に立地する利用施設における再生可能エネルギーの活用、地産地消等の取組を進めることで、国立公園の脱炭素化を目指すとともに、脱プラスチックも含めてサステナブルな観光地づくりを実現していくエリアとして、今後も取組が進められることになっています。



<https://www.city.kushiro.lg.jp/machi/kankyou/1004263/1004289/1004291.html>



## 第6章 地域間ネットワークと受入体制のあり方について

本章では、ロングトレイルツアーを継続的に推進する環境を整備するための、地域におけるネットワーク体制の考え方について記載しています。

## 6-1. ロングトレイル活用の円滑な運営にむけた事業者間ネットワーク構築の必要性

- ロングトレイルの活用を継続的に推進していくためには、アクティビティ事業者同士の相互理解は重要となります。日常的にアクティビティ事業者間でコミュニケーションをとることで、お互いのアクティビティやガイドング内容の把握につながり、行程前後のアクティビティや体験を意識したガイドングを実施することができ、高付加価値なツアー企画や参加者の満足度の向上につながります。
- 悪天候や自然災害時の安全対策について、日常的に情報共有を行うことで、事業者間で連携がとりやすくなり、参加者の安全対策を円滑に行うことができます。また、ロングトレイルの活用に関わる関係者間で広域的に情報・ノウハウ共有を行うことで、地域全体の安全対策・危機管理対応力が向上します。  
(第4章4-2. 地域全体での安全対策の向上にむけた事業者間連携)
- ロングトレイル活用にむけた広域的なネットワーク組織が設置されることにより、欧米市場を中心とした海外及び道内外のツアーオペレーターへの情報提供や問い合わせ・相談への対応にむけたワンストップ窓口機能を果たし、ロングトレイルを活用したツアー造成等を円滑にサポートすることが可能となります。
- またロングトレイル上及びその周辺エリアにおける安全情報などを一元的に情報集約することにより、地域内のリスクマネジメントにもつながります。

—— 事業者間ネットワークを構築するには以下の要素が必要になります ——

① ロングトレイル活用の継続的な推進にむけた事業者間の日常的なコミュニケーションの場づくり

② 安全対策の円滑な実施にむけた日常的な情報共有の場づくり

③ 円滑なツアー造成にむけたワンストップ機能



## 6-2. 地域コミュニティとの緊密な連携による受入体制づくり

- 地域住民、土地管理者（所有者）、一次産業関係者、地域行政等の地域のステークホルダーとの日常的に緊密な連携をとるべく、意見交換や情報共有の場をつくることにより、地域コミュニティとの信頼関係が醸成され、ロングトレイルを活用したツアーの受入地域においてホスピタリティの向上と安全対策・危機管理体制が強化されます。
- 現在道東地域においては、アクティビティを実施しているフィールドごとにアクティビティ事業者と地域コミュニティ関係者とのネットワーク組織が存在していますが、ロングトレイルの活用に向けた広域的なネットワーク組織が設置されることにより、各地域の実践内容が共有され、全体的な地域の底上げにもつながります。
- ロングトレイルの活用においては、地域コミュニティとの良好な関係構築が不可欠です。本ガイドラインが策定され、アクティビティ事業者などロングトレイルを活用する側と旅行者を受け入れる地域コミュニティ側の相互理解が進むことにより、地域住民との交流プログラムの実施などにもつながることが期待できます。
- 欧米市場におけるATにおいては、ツアーの中で地域文化を知る手段として、地域住民との交流の機会を設けることにより参加者の満足度の向上に努めています。

### —— 地域コミュニティと緊密な連携をしていくには以下の要素が必要になります ——

① **ロングトレイルにおける受入地域のホスピタリティ向上や安全対策・危機管理体制強化のための連携**

② **地域コミュニティとの連携強化による地域住民との交流等の円滑な実施**

③ **ロングトレイルとしてのクオリティを維持するための、ステークホルダーが守るべき基準の策定と更新**

(例：ガイドスキル、食事、サステナビリティ、英語対応 など)

令和5年3月（第1版）

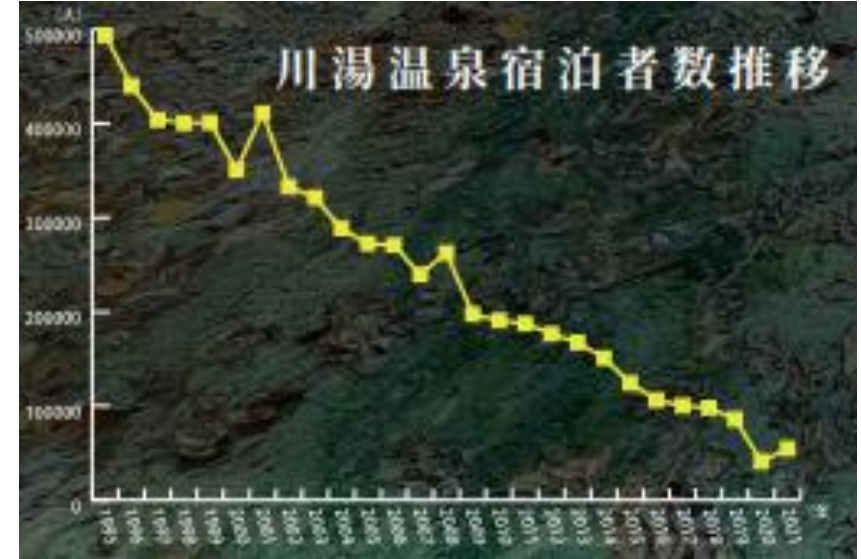
企画・監修 株式会社JTBC総合研究所  
発行者 北海道運輸局

※著作者の許諾無く、本冊子を転載・複製することを禁じます。

# 川湯温泉 再整備の経緯

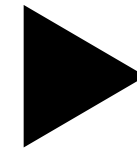
## 過去

- 1900年頃 開湯
- 1934年 阿寒国立公園 指定
- 1966年 歌謡曲「霧の摩周湖（歌手：布施 明）」リリース
- 1991年 年間宿泊客が560,000人となりピーク



## 現在

- 2016年 阿寒国立公園（当時）が「国立公園満喫プロジェクト」において、34国立公園の中で先行的・集中的な取組を行う国立公園として選定
- 2020～2021年 川湯温泉 旧ホテル2棟の撤去
- **2021～2023年 「阿寒摩周国立公園弟子屈町川湯温泉街まちづくりマスタープラン」策定予定**



**転換の好機**



# 川湯温泉の再整備計画について

## 開発の方向性

### 1. 川湯温泉の特長を際立たせる

(川湯最大の特徴である湯の川を中心とした街づくり)

### 2. 適切なスケールの街づくり

(量より質を求める川湯にふさわしい規模の街づくり)

### 3. 訪れる目的を増やす

(冬季アクティビティの開発など1年を通した集客を図る)

## 景観ルールの策定

○訪れる人が求める国立公園にあるべき姿、川湯らしさのルール化

○既存の住人・事業者とこれから参入する事業者が統一の目標・意識をもって景観を守り育てる

# 「湯の川がつむぐカルデラの森の温泉街」

「湯の川がつむぐカルデラの森の温泉街」

川湯を流れる湯の川は、硫黄山から屈斜路湖へ流れ込み地球の自然活動をダイナミックに見せると共に、川湯に良質な温泉という恵みをもたらし、120年以上に渡りこの地に住む人々の生活を育んできました。

これからの川湯温泉では、湯の川を街の主役とした表通りにすると共に、国立公園にふさわしい森に溶け込むような街づくりをする事が川湯温泉にしかない魅力を創出し、川湯に新たな人を呼び込み、交流と物語を紡ぎ出します。

▼

### 開発の方向性

<h4>1. 川湯温泉の特長を際立たせる</h4> <ul style="list-style-type: none"><li>○川湯最大の特徴である湯の川を中心とした街づくり</li><li>○国立公園内の立地にふさわしい自然と賑わいが一体となった街並みづくり</li></ul>	<h4>2. 適切なスケールの街づくり</h4> <ul style="list-style-type: none"><li>○観光客入込数、宿泊施設数、商業店舗数など、数ではなく質を求める川湯温泉エリアにふさわしい規模の街づくり</li><li>○建物の高さや規模など、街が一体となった上質な景観づくり</li></ul>	<h4>3. 訪れる目的を増やす</h4> <ul style="list-style-type: none"><li>○温泉や宿泊に加え、ロングトレイルの立ち寄りや日帰り観光など、川湯を訪れる新たな目的を作り総体的に集客増を図る</li><li>○観光客の入込が落ちる冬季に、冬ならではのアクティビティや楽しみをつくり出し、一年を通した集客を図る</li><li>○宿泊率の向上へと繋がるよう、日中のアクティビティや街歩きなど滞在時間の消費拡大となる街づくりを行う</li></ul>
---	--	---

景観ルールの策定

- 訪れる人が求める国立公園にあるべき姿、川湯らしさを「丁寧なデザイン」としてルール化する。
- 既存の住人・事業者とこれから参入する事業者が、統一の目標・意識を持ってこの街の景観を守り育てる。

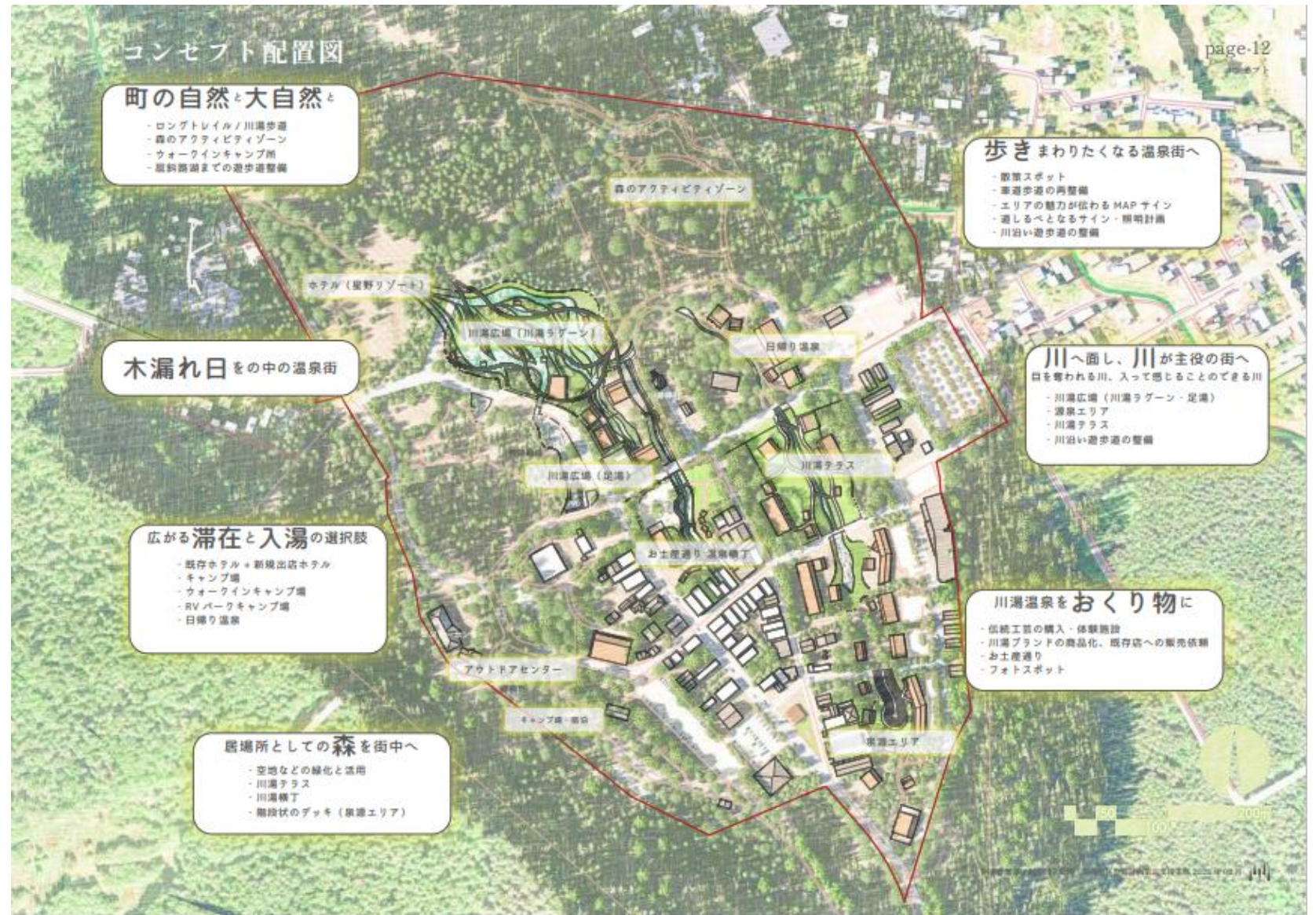
▼

目指すべき姿を維持し、街の景観が川湯の財産となる



# 再整備エリアについて (案)

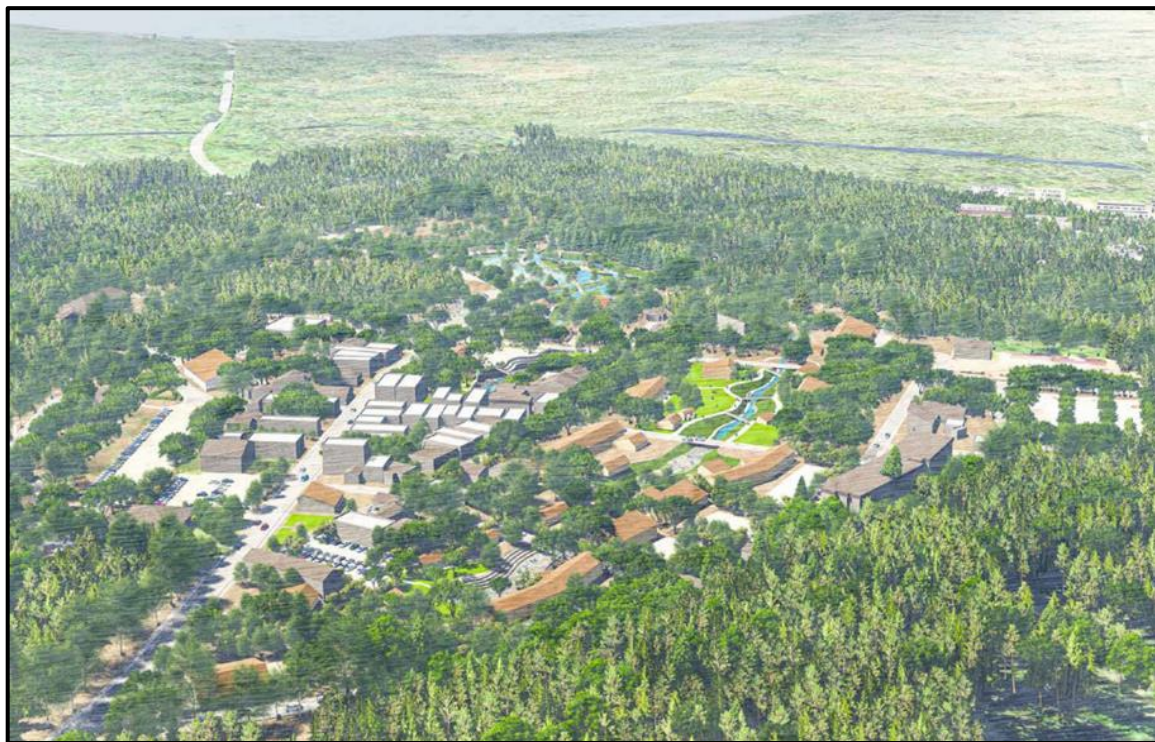
- ・ 町の自然と大自然と
- ・ 木漏れ日の中の温泉街
- ・ 広がる滞在と入湯の選択肢
- ・ 居場所としての森を街中へ
- ・ 川湯温泉をおくり物に
- ・ 川へ面し、川が主役の街へ
- ・ 歩きまわりたくなる温泉街へ
- ・ **上質な宿泊事業者の誘致**





# 森に溶け込む温泉街

イメージパース 全景ー1



イメージパース 全景ー2







# オンネトー野営場休憩舎（UPIオンネトー）

○施設使用開始 令和4年6月1日

※毎年6月1日～10月31日までの営業期間  
（オンネトー国設野営場と同じ営業期間）

## 施設機能

- ・休憩、観光案内、飲食、シャワー、アウトドア用品販売・レンタル、フリーWifi、ワークショップ開催など  
（現在携帯電話の電波なし、固定電話有（野営場管理棟も有））
- ・ワークショップ（グリーンウッドワーク、ブッシュクラフト、テントサウナ、焚火など）
- ・防災拠点（防災ヘルメット、圧縮毛布、担架、エアマット、簡易ベッド、発電機など）

※今年度の雌阿寒岳遭難者捜索時に捜索拠点として活用。

令和4年6月～10月  
 休憩舎利用者数 8,853人 ※手動カウンターで計測  
 野営場利用者数 1,993人 ※過去7年平均1,713人  
 R4野営場利用割合 道内57% 道外43%

暖房→薪ストーブ（十勝東部森林管理署の協力により薪は野営場周辺の風倒木、枯損木を使用）  
 木造→道産カラマツ材使用  
 電気→RE100対応予定（2025年までを目標で）  
 マイボトル使用によるペットボトル削減推奨、ゼロカーボンに向けた普及啓発発信施設





フェザースティック作成



テープカットではなく焚火着火式







# ウッドキャンドルナイト2023（1月28日開催）



カラマツの林地残材を活用したウッドキャンドル（スウェーデントーチ）やアイスクャンドルを楽しむイベント。追い上げ材（根元の端材）なども活用。様々な焚火台や無電源のペレットストーブも設置。林業グループの「あしよろ岐志会」や観光協会が中心となって実施。今年はUPIも参加してテントサウナ体験等も実施。

**林業の理解向上＋冬の観光イベント＋森林資源活用**